

に

にここに笑顔で

い

いつもみんな

つ

紡ぎ繋げる心で

に

日本一をめざすのだ

## Good Try! Good Job!

### 〈『部活動の地域移行について考える』①〉

小中学校の頃夢中になったのは、王・長島のプロ野球、北の海・輪島の大相撲、ジャイアント馬場・アントニオ猪木のプロレス、沢村忠のキックボクシング等々、憧れのヒーローがいるスポーツ界。アニメでは、「巨人の星」、「あしたのジョー」、「アタック NO.1」、「エースをねらえ」。テレビが最大の娯楽の時代でした。マンガ本では、「ドカベン」や「キャプテン」の単行本を何度読み返したことが。

サッカーは、その当時の日本国内ではマイナーな部類でしたが、東京テレビの「三菱ダイヤモンドサッカー」は秀逸でした。ヨーロッパや中南米のクラブチームの試合が土曜の6時に放映されていて、テレビにかじりつくように観たものです。元日本サッカー協会理事長（東大出のメキシコオリンピックコーチ）岡野俊一郎と金子アナウンサー、既に二人とも故人ですが、このコンビによる解説は、サッカーへの造詣の深さと軽快な口調による絶妙のやり取りで、スポーツ中継解説史上で最高の名コンビだと言えるでしょう。

テレビを通してとはいえ、現役時代のジーコや皇帝ベッケンバウアー他往年の伝説のスーパースターであるレジェンドや、海外日本人プレーヤー第1号奥寺康彦のプレーをリアルタイムで触れられたのは何とも幸せでした。

高校2年の時、担任の先生が全日本剣道選手権の県代表で出場したので、日本武道館に応援に行きました。恩師の相手は過去に日本一の実績をもつ国士舘大出身の強豪で、試合は恩師の完敗でした。それよりも、先輩を応援する相手サイドの大学生集団の統制の取れた憐とした姿がとても感動的でした。

早々に敗れたので、旧国立競技場にラグビー早明戦を見に行きました。折しも大学ラグビー全盛期。当時日本最大のスタジアムは通路まで立錐の余地なく、日本スポーツ界史上最大の7万弱の観客に圧倒されました。一方、その頃の社会人のラグビーの試合はと言え

ば、いつも閑古鳥が鳴く有様でした。

大学生の時には、同じく旧国立競技場にワールドカップアジア予選の日本対韓国戦を観に行きました。未だJリーグ発足前。実業団のサッカーリーグの試合は観客もまばら。その試合も国際試合というのに会場の半数にも満たない観客の中、力の差も歴然で0対2の完敗でした。雨がしとしと降る中、肩を落としながら競技場を後にしました。「また今回もだめだったな」。道すがら、友人と交わした唯一の言葉でした。

そんな思い出を振り返るにつけ、特に今日の日本サッカーやラグビー、バスケットボールなどの隆盛は真に隔世の感です。

何が変化したのか。もちろんメディアの影響も大きいわけですが一番は、「普及」と「強化」の歯車がうまく機能したためだと思います。「普及」とはすそ野を広げること。「強化」とはトップレベルを育てること。

サッカーで言えば、もちろんJリーグの発足に尽きます。しかし、それだけではここまでたどり着けなかったでしょうし、これからも長続きはしないだろうと思います。

サッカー人気がどん底の頃にも、学校や地域や実業団でコツコツとサッカーに取り組んでいた選手や指導者、手弁当で指導していた町のサッカーチームのコーチなどがいたことを決して忘れてはならないでしょう。そういった草の根の努力があればこそその現在だと思うのです。

さて、近年は、公立中学校でさえ、その競技の伝統強豪校や有能な指導者のいる学校に生徒が集まるような風潮もないわけではありませんが、義務教育段階の公立中学校のほとんどは、何はともあれ「強化」よりも「普及」の担い手であり続けてきたと思います。もちろん、未来の大谷や三苫のような選手を育てることを夢見ながら、情熱を傾けて高いレベルで部活動指導に従事している先生もいることとはと思いますが、教育活動の一環として、「子どものために」と思って頑張ってきた先生方がほとんどでしょう。

令和8年度からの部活動の地域移行に向け、より高みを目指す者、つまり「強化」のカテゴリーを求めるものの受け皿についてはさほど心配ないと思っています。ただし、時間的労力や経済的な面も含めた保護者の受益者負担の部分はかなり大きくなると予想されます。

一方、これまで中学校が担ってきた「普及」のカテゴリーの受け皿が不十分になることを特に強く懸念します。学校教育で部活動の存在が隅に追いやれる中、放課後17時前に帰宅する子どもたちは、最優先に一体何に取り組むのでしょうか？勉強はもちろんのこと、本当に自分が自主的に取り組める有意義なことを見つけて頑張ってくれるのか、とても不安です。

このネット社会のご時世、子どもが興味・関心を惹くものや誘惑に駆られるものはわんさかと存在しています。これまで部活動に打ち込んでいた時間分が、ゲームやネットの時間に振り替わりはしないかが特に懸念されます。

アメリカ合衆国がスポーツ大国・エンターテインメント大国であり続けるのは、人種的な体格や身体能力、感性等の優越が根本にあるのはもちろんです。しかし、それ以上に、スポーツや文化を楽しむ、子どものスポーツや文化を支えるコミュニティ、国や地域としてのスポーツや文化をしっかりと育てるカルチャーが根付いているのが大きいと思います。

その一例として、子どもの指導に携わる大人が、「Good Try!」「Good Job!」と、常に子どもたちを励まし伸ばす指導の姿が当たり前なのが象徴的です。

先輩のしごきや不合理の練習に耐え難きを耐えた自身の学生時代、教師になって時には指導者の不適切な言動を目の当たりにしたこともある人間として、今回の部活動の地域移行が、本当にスポーツや文化を楽しむ、楽しいことが競技力や競技人口につながる改革、真のスポーツ先進国になるように、すべての国民が真剣に考えなければならない、それが今なのです。